別紙様式１

平成２９年度　学長戦略経費（公募型プロジェクト）研究成果概要報告書

経費の種類	□共同研究推進　□若手教員研究支援　■個人研究支援 □研究推進重点設備　□研究推進設備修繕
プロジェクトの名称	教育的タクトについてのエピソードの記述収集による授業と校内研修の現象学的研究
報告者氏名・所属・職名	宮原　順寛　・　大学院　教育学研究科　学校臨床心理専攻　・　准教授
プロジェクト担当者氏名・所属・職名	宮原　順寛　・　大学院　教育学研究科　学校臨床心理専攻　・　准教授

研究内容及び成果の概要

本プロジェクトにおいては、学長戦略経費等による研究支援を得て、以下の表１に示すような学校で授業研究を行った。

表１．　授業研究に訪問した学校の概要（2017年度、延べ学校訪問日数）

行政区分 / 学校種	北海道　札幌市						長崎県	合計
	北区	清田区	白石区	東区	中央区	手稲区	平戸市	
小学校	9	19	12	3	—	1	3	47
中学校	2	—	2	2	1	—	—	7
特別支援学校	3	—	—	—	—	—	—	3
合計	14	19	14	5	1	1	3	57

この表1に示したように、札幌市内の小学校を中心に、校内研修型の授業研究及び個人カンファレンス型の授業研究を延べ57校において行った。最も数多く訪問した学校は清田区のＡ小学校の13回、次いで白石区のＢ小学校の10回であった。なお、上述の北区の数値には、北海道教育大学附属学校を含んでいる。

本プロジェクトにおいて現象学的な質的研究の成果として示されたのは、多忙をきわめる学校現場の中で機敏で適切でとっさの判断としての教育的タクトを発揮するためには、子ども理解と教科内容研究とをつないだ日常的な授業研究が重要であるということである。とりわけ「ジャンプの課題」と呼ばれる教室の一人ひとりの子どもたちの発達の最近接領域に働きかける課題の設定については、しばしば誤解して捉えられているような「最も上位の子どもにもすぐには解くことができない難問を課題として設定すればよい」ということではなくて、子どもたちが「わからない」「できない」という自分の状況を表明することができる学級づくりがたいへん重要な位置を占めていた。そしてそのような学級を創るためには、日常的な授業の展開においてグループ活動から一斉活動へと移行する場面に際して、「困っているグループ」「困っている人」の課題を学級全体で共有することから議論を始めることが重要であるという知見が示された。

成果の公表の状況

【著書】　（2017年度の刊行なし：2018年度に刊行予定あり）
【学術論文】　（2017年度の論文投稿なし：2018年度に論文投稿予定あり）

教育現場で活用可能な分野・教材等

学校からの授業研究の要請があれば、本研究において得られた知見を活用した授業研究を学校へ出張して行う用意がある。

配布又はダウンロード可能な資料	（なし）
問合わせ先	代表者：宮原順寛 電　話：総務部企画課企画・研究グループ（011-778-0649）へお問い合わせください。 FAX　： mail：総務部企画課企画・研究グループ（s-kenkyu@j.hokkyodai.ac.jp）へお問い合わせください。